令和８年度第３回清瀬市社会教育委員の会議　議事録

令和８年度第３回清瀬市社会教育委員の会議が令和８年９月１１日に開催された。
出席委員、議事の大要は次のとおり。

日　　時　　令和８年９月１１日（金）午前１０時から１１時４５分まで

開催場所　　清瀬市役所本庁舎　２階　市民協働ルーム（対面開催）

出席委員　（対面参加）
　　倉持議長、西田副議長、松山委員、玉置委員

欠席委員　　渋谷委員、永嶋委員、大野委員

事 務 局　　生涯学習スポーツ課　山本担当課長、上竹係長、八巻主事、成田

次第
１　開会

２　議題
（１）不登校支援のネットワーク・フォーラムについて
（２）清瀬市生涯学習基本方針について

３　報告等

４　閉会

（倉持議長）
　それでは、令和８年度第３回清瀬市社会教育委員の会議を始める。
　先日、無事に不登校支援ネットワーク・フォーラムも開催でき、皆さんご協力ありがとうございました。本日の議題も、最初は不登校支援ネットワーク・フォーラムから始めたい。
　議題１について、事務局より説明をお願いする。

（事務局）
　８月３０日開催のフォーラムについて、教育委員と社会教育委員の皆様のご尽力のおか

げで、当事者や保護者にお話していただくという、他ではなかなか類を見ないような形式での素晴らしいフォーラムになった。感謝申し上げる。
フォーラムについて、アンケートを用いながら、課題の洗い出しなどを行いつつ振り返りたいと思う。参加人数は３８名。そのうち１名は当日傍聴された方で、後半のグループワークにご参加いただいた。欠席は６名。
資料のアンケート集計結果で、全体的な意見として、フォーラムが有意義であり、参加して良かったという肯定的な意見がほとんどを占めている。
なお、気になる意見として、不登校経験者のインタビューについての意見の中で、「サクセスストーリーのヒアリングのようで、そこだけは少し違和感があった。」「大人にされて、言われて、うれしかったこと、嫌だったことを聞きたかった。」というものや、グループディスカッションについて、「実際に情報がどこまで伝わっているのか、必要なタイミングで情報を提供する必要性を感じた。」と、ネットワーク・フォーラム本来の目標のような意見もあった。
また、全体をとおした意見として、「子ども・若者の意見結果は、母数が少なく残念だった。」や「周知が難しかった。夏休み前にチラシやデータがあると保護者や職員にも伝えやすい。」など、事務局からの子どもたちへのアンケートや周知のタイミングがフォーラム開催の直前となってしまったところが要因と思われる意見も出ていた。
続いて、撮影した動画の公開について、当初は限定公開をするという話で進めていたと思うが、不登校経験者の保護者の方のお話については、より多くの方にご視聴いただきたいということで、ご本人に許諾の確認をした。しかし、動画そのもの、本人の声のみ、スライドと自動音声を組み合わせた形での公開など、そのいずれの方法であってもご遠慮いただきたいという回答だった。ただし、読み原稿を文書化したものであれば公開して構わないとの許諾をいただいている。
また、不登校経験者の方に関しての動画については、内容がかなりセンシティブなため、配信等どうするかご検討いただきたい。例えば、用途を限定して、教員だけの研修の際に公開するなど、かなり限定的な公開にするべきではないかと考えている。これについて、どのような場面で公開するか、今後決めたいと思う。
次に、次回のフォーラムの日程について、来年度も開催するのであれば同時期での開催を考えている。今年のフォーラムについては、年度当初にスケジュールや内容等を検討させていただいたが、スケジュールがかなりタイトになってしまったので、今年度のうちに日程調整や内容等を決めていく必要があると考えている。
今回はしあわせ未来センターのボールルームで開催したが、少し手狭感があったと思うので、市役所の研修室を仮押さえした。他の研修などですでに予定されているものもあったが、７月３１日土曜日、８月１日日曜日、８月７日土曜日、８月８日日曜日の４日間について、会場の仮押さえをしている。この日程を候補日としたいが、夏休みの終わり頃が良いということであれば、改めて会場の検討をしたいと思う。
今年も１２月に教育委員との懇談会が予定されているので、振り返りや来年度の実施についても、可能であればご意見をいただき、議論していただければと思う。

（倉持議長）
まず、委員の皆さんから先日のフォーラムの振り返りやお気づきの点、来年度に向けての話など、少し時間を取っていきたいと思っている。ご自身の感想や意見、このアンケー

ト結果を見ての感想や意見などいかがか。まずは西田副議長からお願いしたい。

（西田副議長）
　前回も少し伝えたが、子どもたちに取るアンケートはもう少しじっくりと、皆で考えられるようなもので、もっと母数を増やしても良かったのではないかと感じている。次年度もアンケートを取るのであれば、前もって準備ができると良いと思った。その他は良かった。

（倉持議長）
　ありがとうございました。それでは松山委員、お願いする。

（松山委員）
　内容に関しては、不登校経験者の方々についてのサクセスストーリーのヒアリングのようだと感想には書いてあったが、むしろ、経験者の方々があの場に来て、自分の経験を人に渡そう、誰かの役に立つのであればと一生懸命に話してくれたことそのものに、私は非常に価値があると思っている。とても緊張されているのも伝わってきたので、あれだけの内容を、話すだけでも余裕は無かったのではないかと思う。本人たちの前向きになれる話題が中心だったことの方が、むしろ良かったのではないかと感じている。
　倉持議長の聞き方がソフトで、良い感じで合わせられていて、非常に良かった。不登校経験者の方に非常に感謝している。不登校経験者の保護者の方にも、もちろん同様の気持ちを持っている。反省という部分では、特にあまり気になったことはない。グループワークについては、私がいたグループは欠席者が少し多かったが、臨機応変に人数調整をしていただけたのが良かった。最初に不登校経験者のお一人にグループに来ていただき、話せたことが良かったので、できれば他の方とも話したかった。現場に関わっている方で全グループを編成していたので、おそらく皆さんそう思われたのではないか。時間は限られているが、もう少し色々な方と話し合っていただけると良かったのではないかと思う。

（倉持議長）
　ありがとうございました。それでは玉置委員、お願いする。

（玉置委員）
　不登校経験者の方の発表で、お二方ともいじめといじりが原因で不登校になってしまったという話で、そこから、自分自身の意識を変えながら立ち直ったとあった。他にも、おそらく違う理由での不登校もあるかと思う。そこのところももう少し知りたい。
　ただ、先ほど松山委員がおっしゃったように、多分本人も、あの場に出て話すことにとても勇気が必要だったと思う。そこまで話していただいて、今まであまり関わりのなかった不登校の方の話が聞けて良かったという思いがある。
　グループディスカッションの時に、たまたま私のグループに、現在不登校になっているお子さんの保護者の方がいて、どのように声をかければ良いのだろうと戸惑った。今日の話を聞いてどうでしたかといった話しかけもできず、何かヒントをもらいたくて参加されているのだろうけれど、その場であえてその方に集中してもいけないと考えてしまった。
　一般的な意見や今回のテーマ、居場所づくりに関しての質問をしたのだが、今現在の当

事者の方たちへのアプローチはどのようにすれば良いのかというのが、個人的な課題となった。もっと色々な方がいるのだろうなということを知ることができたのは、自分にとってはすごい経験となった。

（倉持議長）
アンケートを見ると、やはり色々な方がいらっしゃるので、それぞれ感じ方が様々だと思う。先ほどあえて課題のところをピックアップしていただいたが、やはり概ね不登校経験者の話は、地元の清瀬での話が聞けたのが良かった、清瀬がどんなことをしているのか分かって良かったという感想と、色々な立場の方と話せて良かった、グループワークが良かったという感想が出てきている。そのような意味では、かなり内容を詰め込んではいたが、清瀬の現状と、実際どのような取組をしているかをコンパクトに話していただき、その上で不登校経験者のお二人と、不登校経験者の保護者のお話があり、皆様丁寧にご準備いただいて、言葉にしてくださった。その後、充分にグループディスカッションがあるという構成は、満足感とともに、今回の企画の意図が伝わったという印象を受けた。
アンケートの中にネットワークや繋がりが大事というような言葉も出てくるので、このような多様な立場の方々が会って、検討し合う場、話し合う場、語り合う場ということの大事さを共有できたと思う。
西田副議長がお声がけしてくださり、不登校の経験がある若い方も来ていただき、今悩んでいる保護者の方が一人ではなく複数人来てくださった。感想の中で、保護者の方々が「来てよかった」と書いていただいているが、排除するという意味ではなく、保護者が集まる場はまた別に必要なのか、当事者の目線からどのような場所が必要か、どんなデータが必要かということを考えること自体はとても大事である。
当事者に来ていただいたことは、良かったと思う一方で、今悩んでいるから、接し方や言葉がけを悩むというのは確かにその通りかとも思う。不登校の子を持ち、悩んでいる保護者が潜在的にはもっとたくさんいると思うので、それはそれで別の機会が必要かと思った。何かそのような情報提供や場の提供のようなことができれば良い。

（西田副議長）
色々なところでやっている親の会などの情報を知っておいてもらえることができれば、それだけでも違う。清瀬市や東久留米市でも何か所かある。

（倉持議長）
学校の取組については、今回情報提供できたから良かったが、保護者支援の方についても少し情報提供のようなことができると良いのかと思う。
今回は不登校経験者の保護者の方の話のインパクトがあったと思うが、当事者や様々な立場の方が参加したということもあり、最後のグループ発表のところで保護者支援の話などが割と出ていたような記憶があるので、保護者支援の情報提供についても必要だと思った。
登壇いただいた方々が、とても準備されていて、勇気を持って来てくれたということが、何しろ大きかったと思っている。
まず皆さんと検討したいのは、動画の公開をどうするかということだが、不登校経験者の保護者の方に関しては、動画、音声どちらも遠慮したいという意向がある。プライベー

トの中身も含まれているので、当然だと思う。読み原稿を文章化したものであれば良いとのことだが、お子さんやパートナーの話が出てくるので、そのままでは難しいと思う。少し整理した形であれば良いということなのかも知れない。
　また、不登校経験者の二人についても、動画は撮影したが、誰でも見られる内容ではない。せっかく撮影したので何か活用ができればという想いはあるが、動画の公開そのもの、範囲や方法について、ご意見はあるか。

（松山委員）
　私は今回の内容を一般に公開する必然性は無いと思っている。この時代、どのように切り取りをされ、どのように使われるか分からない。
　もちろん、動画であれば、ある程度その場の空気やその言葉の文脈など全部が分かるので、文章でまとめるよりも誤解なく伝わるかも知れないが、一般的に広める必要があるものなのか。やはり学ぶべき場で、学びたいと思う人たちが、話して考えたり、ディスカッションをしたりということであれば活用する意味はある。内容がセンシティブなので、何となくだが、流す必要はないと思っている。どのように利用されてしまうか分からないので、慎重に検討したい。

（倉持議長）
　教員研修など、清瀬市内の教員の学習教材として提供するというのはいかがか。事前に申込みをしていただく形で、誰が見るかは事務局で把握する。申込みをしていただいてから、限定公開のアドレスを送る形の運用方法などはいかがだろうか。対象者を教員や別室登校の支援員、指導員など、要するに学校経由で申込みをしてもらうような形で、教職員に留めるという案はどうか。

（松山委員）
　それなら安心だ。内容を補足できる場で見て欲しい。一般化できるものではないので、ある程度説明可能な利用がご本人たちにとっても良いと思う。

（倉持議長）
　不登校経験者のお一人は、子供食堂の話や学習支援の話など、学校外の支援の話も出てくる。
　もう一方の方は別室やフレンドルームがかなり支えになったという話や、週に１回、カウンセラーが話を聞いてくれたのが良かったという話などが出てくる。教育委員会の先生や指導員が聞くと、どのようなサポートによって、どのような力になっていくのかということに気付いていただく良い機会になるのではないかと感じている。
　不登校経験者のお話を伺うと、「いじめなどで来られなくなったが、友達に会いに行きたい」といった人間関係の話も出てくる。不登校であっても給食だけは食べに来る気持ちなどが分かる、という意味では、学校関係者や別室の指導員に聞いていただくのに、とても良い教材になると思う。
　清瀬市で行っている学習支援は何の事業か。当時の話だったので、今も行っているとは限らないが、社会事業大学の学生がボランティアに来て、話を聞いてもらったり絵を描いたりして、とても支えられたといったエピソードがあった。

（西田副議長）
「まなぶる」だと思う。駅前のビルの一室で、今でもやっている。ただ、そこもやはりボランティアが足りないと聞いている。

（倉持議長）
どうしても人やお金や場所がないと言って、継続が難しいという現状がある。大学生による支えは、社会教育側から受けとめる話だったと思っている。放課後の学習支援活動は、貧困家庭や外国にルーツがある子どもにニーズがあるとよく言われているが、不登校の方にもニーズがあるのだなと思った。学校には行けないけれど、そういう場所には来て勉強したり話したりできるので、とても大事だなと感じている。今でも清瀬ではそのような支援を続けてやっているのか、聞きながら気になっていた。

（西田副議長）
子育て世帯の訪問支援事業の中で、学習支援というセクションがきちんとあって、学習を支援できる大学生を自宅に派遣しているような家もある。これについては登校、不登校は関係ない。

（倉持議長）
不登校経験者の方の話では、異世代のような斜めの関係をエッセンスとして感じた。話を聞いてくれる先生や親以外の大人という存在が安定的にあることで、せめてその日は絶対に行こうと思え、張り合いになっていたというお話しだった。やはり学校内外の教育が色々なところで必要なのだとお二人の話から感じた。
動画は基本的には申込み制にして、学校の教職員に教材として使うことを想定し、ご本人にもそれでよろしいか確認を取り、必要であれば編集もする。事務局に教材化の準備をしていただき、学校教育の方とも協力する形で研修教材を提供する。
不登校経験者の保護者の方は、読み原稿を文章化したものであれば良いとのことだが、誰がどうやってまとめて文章化するか。

（西田副議長）
ボリューム的にどのぐらいがいいのか。スライド２０枚ぐらいで１５分はあったと思う。例えば、何枚ぐらいにまとめてくださいというお願いは本人にできるかと思う。

（倉持議長）
読み原稿を文章化したとして、それをどこに公開するか。市内の家庭教育学級や保護者、ＰＴＡあたりか。でもそこまでは広げ過ぎだろうか。

（事務局）
教育長が当初、不登校経験者の保護者の方に確認してほしい旨を伝えられた段階での範囲としては、学校関係者はもとより、不登校の子どもを持つ保護者を含め、多くの人に聞いていただきたいということだった。今悩んでいらっしゃる方を含めていたようだが、それを不登校経験者の保護者の方にお話しさせていただいた結果として、文章化し

た読み原稿以外はご遠慮したいというお話しだった。

（倉持議長）
整理した内容を、どのようなツールで、誰に、どのように共有するのかを検討する必要がある。保護者の皆様に伝えたいとなると、どのようなツールや方法になるのか。一斉に周知するような内容のものではないから、直接のコミュニケーションや双方向の対話を通じて、つながる関係を築いていただきたいと個人的には考えている。
例えば不登校について考えるというような家庭教育学級講座があれば、そのようなところで提供すると、とても良い学習教材になるのではないかと思った。各学校の校長先生からお便りを入れるという話だと、少し違うかと思うので、もう少し検討が必要だ。
次回の社会教育委員の会議は１１月なので、どのようなツールや方法で、どのような場でまとめた資料を活用するかという原案を考えていただきたい。動画の方は活用案ができたので、今日話した方向で進めつつ、原稿の活用方法ができたら不登校経験者の保護者の方に読み原稿を整理していただく。本当はこのような依頼をするとしたら、講演とは別の仕事なので、原稿料を支払うほどの作業で負担をかけてしまうという問題も出てくる。しかしながら、ご本人の文章をこちらで勝手にまとめるというのも少し違うような気もする。まとめていただいた原稿が活用される場に参加された方にとっては、かけがえのない経験となり、深く心を揺さぶられるだろうと思う。
それでは、動画については今申し上げた方向で進める。来年度のフォーラムについては少し早めに準備を始めたいということで、来年度も開催するという方向で良いか。今年度のうちにスケジュールや内容を組んでいくということである。今年は教育委員との共催だったので、１２月の懇談会では、振り返りつつ来年度の話を協議できると良いと思っている。今日と１１月の本会議で、皆さんと一緒に案を出し合い、それを教育委員と一緒に詰めていく方向が良いと思っているが、それでいかがか。今より広い会場を取ろうとすると、市役所の研修室になり、参加者を１００人規模にできるのでかなり増やせる。今回の倍ぐらいには参加者を増やせるというメリットはあるが、予約を取れる日が限られている。土日では７月３１日、８月１日、７日、８日の４日間しかないため、ひとまず仮押さえをしていただいている。夏休みの終わりというよりは、夏休みの初めという感じのスケジュールになるが、これはいかがか。
あとは内容だが、来年度の内容も併せて少しご意見をいただければと思っている。段取り的なスケジュールと当日のスケジュール、内容も併せてご意見を頭出ししていきたいと思うがいかがか。

（西田副議長）
予算はあるのか。お呼びする方も含めて、予算次第というところがあると思う。

（倉持議長）
予算もないのに話し合っているところがある。清瀬市で何とか取っていただけると良い。次回も大学の方でまた予算が取れるかは分からない。今取っている予算は少なくとも今年で終わる予定である。来年度の状況は不透明なので、予算はまず教育委員会でこれまでの実績を基に、予算取りのアプローチをしていただきたい。
その他スケジュールや内容はいかがか。去年は学校内外の支援という形で、支援をし

ている側の話を聞いた。今年は不登校経験者と保護者の話を聞こうということで、経験談を聞くスタイルで開催した。去年は社会教育委員の会議だけで開催したが、今年は教育委員との共催とした。去年も教育委員に出席はしていただいたが、今年は共催という形でステップを踏んできている。

まず、開催時期について、皆さんのスケジュールはいかがか。私は８月の７日、８日に大学の集中講義が入っており不在となる。来年の話だが、今年ベースで予定を見ていただいて、もし、７月３１日や８月１日の開催だとしたらいかがか。

（西田副議長・松山委員・玉置委員）

問題ない。

（倉持議長）

皆さん都合が良さそうなので、７月３１日を第１候補として、来年度は規模を拡大して開催してみる。学校は２０日ぐらいから夏休みが始まるので、一段落したあたりで開催する。

内容についてはいかがか。去年と同様、今年も前半に登壇者の話を聞いて、後半にグループワークをするスタイルが良かった。その日だけのイベントにしないという意味では、事前に子どもにアンケートを取り、子どもの声を聞くということを来年はもう少し計画的に行いたい。いつ、誰に、どこで取るのか、学校に協力してもらうのか、今から準備すればもう少し色々とできそうだ。

（西田副議長）

データを蓄積しておけると良い。今回は９歳から２５歳までを含んでいた。

（倉持議長）

そのようなバリエーションの面白さがある。学校だけではどうしても、小中学生の最大６歳から１５歳までとなる。ただ、学校でアンケートを取ると、負担が増えるという問題があるかもしれない。学校でタブレットを活用して、例えば道徳の時間や総合の時間などで１５分ぐらい取ってもらって、アンケートに答えてくださいというように協力依頼はできるものか。

（事務局）

例えば、二次元コードをお渡しして、家で回答してもらうことはできると思う。

（倉持議長）

家で行うとなると、保護者も巻き込むスタイルになると思う。

（西田副議長）

何を聞くかにもよる。不登校だけを対象にするのか。

（倉持議長）

いじめのアンケートのように、重くしっかりしているものにするのか、どのようなス

タイルで、何を聞くのかなどメッセージ性によって違う。不登校がテーマだと、学校に行きたくないですかというような話になる。

（西田副議長）
　今回、事務局に子どもへのアンケートを作成してもらったが、質問項目がたくさんあり、結果的にはタイトなスケジュールということと、答えられる子どもたちがあまり多くないのではないかということで、最終的に質問項目を１つに絞っていただいた。ただ、それもとても勿体ないと思っていて、本当はもう少し時間をかけて丁寧に聞けたら、もっと違ったかもしれない。

（倉持議長）
　このアンケートは、ネットワーク・フォーラムの場にて大人たちで共有するという意味もあると思うが、このアンケートをどのような内容で、どのように取るかといったことは価値のあることだと思っている。ただ、少し丁寧に検討した上でやる必要があると思う。いじめのアンケートについては国や都道府県で取っているが、不登校のアンケートについては何か定型のものはあるのか。

（西田副議長）
　子供食堂で子どもたちにヒアリングして、それをまとめているデータを見ることはあるが、あまり聞いたことがない。

（倉持議長）
　不登校というと、何か問題が起こった後のような聞き方だが、居場所に関するアンケートや学校への行きづらさなどに関するアンケートを清瀬市内全域で力を入れて取ろうとなれば、割と先進的な取組になるのではないか。その部分でもしっかりと検討しないといけない。これも継続検討としたい。
　それでは、来年度の内容について、今日は少し方向性を検討したい。例えば、来年はこのような感じが良いとか、今年の内容を継続する形でも良いとか、また少し違った切り口で新しいテーマを設定するなど、どのようなことでも良いので、今日の段階でのアイディアやご意見をお伺いできればと思う。

（松山委員）
　ＮＰＯに「カタリバ」という団体があり、割と子どもと若者の調査を行っている印象がある。不登校の子どもと保護者に対するアンケートや１０代の居場所、子どもたちの居場所のアンケートや独自調査を行っていて、それも公表されているので、参考になるのではないかと思う。

（倉持議長）
　その団体については、アンケートやシンポジウムなどでも、広く活動をしているので、何か参考になるかもしれない。
　去年は有村先生から別室登校の話と、こども劇場のお二人から取組等の話を伺った。清瀬市内で話を聞くとしたら、どのような人が良いか。

（玉置委員）
　今回発表してくれた方は当時フレンドルームを利用していた。フレンドルームや別室を利用していた方の名簿というものはあるのか。そこを利用したＯＢやＯＧの方に、アンケートを取るのはどうか。どう変わったかなど経験者の生の意見などを聞くのは難しいのか。もしあるとすれば、そのような資料を提供いただくのはどうか。

（倉持議長）
　おそらく登録をして利用をしているので、把握はしていると思う。もしかしたらアンケートはもう取っているかもしれないが、新しく聴取することは難しいと思う。

（事務局）
　過去の利用者名簿を使用してアンケートを取って良いかということか。アンケートを取るために利用するということがそもそも良いのかということについては課題があると思う。
　フレンドルームを利用するための個人情報の提供になっているので、それを、所管課以外が利用するということはできないと思う。利用者の一人ひとりに、「このように利用して良いか」という確認をしなければならない作業が発生してくるので、なかなか難しいのではないか。

（倉持議長）
　少し時間はかかるが、今利用している方々に、いらしたときにお手紙を渡して、保護者の了解を得て、アンケートにお答えいただくということは可能だと思う。さかのぼって過去の方となってしまうと難しいと思う。
　今回のアンケートに回答した９人のうちの半分ぐらいはフレンドルームを利用されている。フレンドルームが機能していると思われるし、もちろんそのような方たちが、他の場にも出ているというのもあるのかもしれない。フレンドルームを利用した子が、その後どのようにそれを捉えて、どのように受けとめて、力やサポートになったのかという今回の不登校経験者の色々な話は、活動や支援をしている側にも大きな励みになる話だと思う。もちろん、そこから漏れ落ちてしまう子もたくさんいると思うが、このような話をまた聞くというのも良いのかもしれない。先ほど玉置委員がおっしゃっていたように、いじめ等ではない別の理由で不登校になってしまうお子さんがいれば、話を聞くのも良いのかもしれない。理由がはっきりせず、行き渋りのようなところから行かなくなる子の方が数としては多いという話もあるが、どのように探すか。

（西田副議長）
　これは肌感覚でデータではないが、フレンドルームを利用できないお子さんがすごく多いという印象があり、昔よりも登録の人数も減っているような気がする。そのような中で、リーフレットでもどのように位置づけるのが良いのか。フレンドルームに通うお子さんも、そこに温度差がすごくあると思う。今回の不登校経験者のように、積極的に行ける子と、お母さんに言われて行く子もやはりいて、この日だけはというような思いで行って、実績を作ってくるような子もいる。

（倉持議長）
　フレンドルームに行けない、公的な支援が届きづらいお子さんがいる。届いているかどうかよく分からないお子さんがいる。

（西田副議長）
　来ていたのに来なくなった、学校にも行けていないようなお子さんが心配。キャッチするのが難しい。今回のサブタイトルに「つながりの力」と入っているが、一つでも多く、みんなでつながることが大事だと感じた。

（倉持議長）
　スクールソーシャルワーカーが、不登校のお子さんやエリアの把握ということをされているのか。

（事務局）
　実は今回も、スクールソーシャルワーカーには事前に相談をしていた。６月の段階から、「子どもの意見聴取を行いたいが協力してもらえないか。」という相談をしていた。しかし今、フレンドルームに定期的に通えている子どもというのは、かなり少ないというような状況があり、今回はフレンドルームの子どもたちには聞けなかった。通えていない子どもがいるということは、スクールソーシャルワーカーも把握をしている。

（倉持議長）
　スクールソーシャルワーカーについては、以前もフォーラムに来ていただこうと思ったが、仕組みの関係でなかなか難しいというお話も伺ったような気がする。行政の不登校の実情をかなり把握されているだろうから、課題なども含め、フォーラム３年目にしてスクールソーシャルワーカーに話を伺うことがあっても良いのかと思っている。今から頼めば、何とかならないか。

（西田副議長）
　スクールソーシャルワーカーは今何人いるのか。

（事務局）
　２人いる。

（倉持議長）
　２人で市の全部を見ているのは大変だろう。不登校経験者の話は皆さんが関心を持ってくださり、唯一ここでしか聞けない話なので、そのような意味では不登校経験者の話や保護者の話については、私もとても勉強になる。ケースによって違うことはあるが、具体例を知ることができるのは、色々な支援のあり方を考えていく人にとってはとても勉強になる。

（松山委員）

私が感想で、もう少し他のゲストのお話も聞きたかったとお伝えしたが、Aグループが親の会の話をかなり聞いてくださっていて、どのような経緯で立ち上がったかなどを私も聞きたかったと思っている。キーワードとして「保護者支援」が多く出ていたので、親の会の話を聞いたり、保護者にスポットを当てる部会があったりすると、保護者が足を運んでくださるかもしれない。先ほどの玉木委員のおっしゃっていたグループワークでの難しさは出てくると思う。

（倉持議長）
子どもの居場所を多様に作ることもとても大事なことだけれど、それに比べて親の方の情報や、居場所が少ないということがあるようだと、私たちのグループは前半に登壇いただいた保護者の方が来てくださったので知ることができた。学校関係者や議員、管理職が多かったのもあり、親の会の話で少し盛り上がった。
親の会については、登壇いただいた保護者の方は、こども劇場にも関わっていらっしゃったので、こども劇場の方で位置付けたと話してくださった。他にも親の会のようなものはあるか。

（西田副議長）
有名なところでは、東久留米市で開催している方がいる。清瀬市から東久留米市の親の会に参加したり、子どもの居場所を利用しているお子さんがいたりして、地域連携はしている。

（倉持議長）
保護者の方の話を聞いていると、いわゆる共助グループのような感じがした。自分たちで立ち上げることができるといったような話で、それぞれのエリアごとに学校単位で立ち上げているため、行きやすいのかと思った。ただし、人によっては、自分の学校だと顔見知りが多くて行きづらいけれど、隣の地域や広域の方が少し行きやすいという人もいて、選択肢が限られる点には課題があるように思う。

（西田副議長）
子どもも同様である。北側からバスに乗り、乗り継いで南側の居場所を利用する子もいる。みんなが知り合いだから、すぐに分かってしまうところではない方が良いという保護者もいる。

（倉持議長）
少しアイディアが出てきている。これはまだ継続検討だが、そろそろ次の議題に入ろうと思うので、今年の反省から、来年に向けてのご意見など、何か言い忘れたことがあれば、今のうちにお伝えいただければと思う。

（玉置委員）
Dグループに、学校運営協議会で発表された方がいたのだが、図書館統廃合の話や学校で支援をしているということを発表していた。しかし、今回登壇いただいた当事者の方は一切そのような情報も知らず、どこでそのような情報が入るのかという話があった。

清瀬市はホームページなどでそのような公開はしているのか。学校単位で呼び名は違うが、どこの学校でも図書館開放はあるらしい。教育委員会として、それはどのような対応をしているのか教えていただきたい。

（事務局）
学校単位で、各学校のホームページでは公開していると思う。市の教育委員会として該当ページを作ることは現状していない。

（玉置委員）
学校単位だということか。何とかカフェなど、色々と呼び名が違うが、そうしたものがあり、保護者も来られるし、そのようなコミュニティの場になっているらしいと聞いている。

（西田副議長）
六小ライカ（ライブラリーカフェ）などがある。ＰＴＡではなく、コミュニティスクールで地域の方が行っていて、地域で関わっている方が多い。

（倉持議長）
コミュニティスクールや学校支援ボランティアのような要素をもう少し絡めても良いのかもしれない。自分のエリアの話になると、学校支援と地域課題の解決というミッションがあり、保護者同士がつながり合う。玉置委員がおっしゃっていた、この学校運営協議会などの話は、地域の方が学校図書館開放の情報を周知してくれたということで、そこにとても意味があると思う。それこそ、ボランティア活動をしている方に、うちはこのような開放をしていて、このような人が来ますよという話をしてもらい、大人にとっても子供にとっても居場所となる場づくりを、地域の方が学校と連携して取り組んでいるという話も良いと思う。校区を少し意識して、よりローカルなコミュニティで活動すると、地域によってはあまりそのような居場所がない、という地域差の話が気になってくる。学校単位や今ある施設など、身近なところでもでき、学校と協力し合ってもできる。そのように、自分のところではどのようにできるかと考えるきっかけになると思う。保護者の方だったら、まずは学校に行ってみるところから始めよう、ということからできるかもしれない。

（西田副議長）
あとは子供食堂ではないか。清瀬市には不登校に特化したクローズ型の子供食堂もある。充足率１２０％以上で、普通は小学校の数を目安としてカウントすると思うが、十数か所あるので、とても充実している。運営母体はＮＰＯや地域の方など様々だ。

（倉持議長）
子供食堂の話が出てきたら、つながりがあって良いかもしれない。行きやすく、勉強のような感じではないので、そのようなことに抵抗感がある人には良いと思う。不登校経験者のお二人も言っていたが、少し勉強につまずいている部分もあったそうなので、まず堅苦しく勉強をしなくてはいけないという場所ではないというのは良いのかも知れ

ない。保護者にとっても、そのような場があるということを知ることができるというのも良い。

（松山委員）
　少し飛躍するが、先日西田副議長からいただいた食育の文書を見ていて思ったが、私たちのグループでは、勉強の学びも大事だけれど、結局、学校を出た後にどう生きていけるか、というところの支援がやはり大事だという話が出た。自立に向けた支援で、食や自分でご飯を作って食べられることはとても大事だと思う。子供食堂のような支援や形態が普及すると、例えば「食」をテーマにした不登校関係の支援のようにして、食に焦点を当てるのも、今までにない観点があって良いのではないかと思った。

（倉持議）
　食育でもあり、人と一緒に食べる、そこに自然な交流が生まれる。色々なご意見が出てきた。
　それでは、次回もこの検討は続くので、皆さんもお持ち帰りいただいて、来年度の構想をまた考えていただきたい。それをまた、教育委員と一緒に検討していく素材にしていきたいと思うので、よろしくお願いする。
　それでは、議題２の清瀬市生涯学習基本方針について、事務局から説明をお願いする。

（事務局）
　前回までの会議と、議長・副議長との事前打合せで話し合われた内容に則して、事務局で修正したので、資料の清瀬市生涯学習基本方針をご覧いただきたい。
　まず、文章中の表現で、四角く囲った箇所が、修正の検討箇所となる。
また、前回の会議以降に追加修正した箇所は黄色のマーカーを塗っているので、黄色マーカー部分を中心にご説明する。
　１２ページ、Ⅲ生涯学習基本方針の方向性、②基本方針、に「学びを通じた３つの基本方針の循環により、地域全体のウェルビーイングの向上を目指します」と文章を追加した。
　その下の「（1）人づくり」の最後で、「担い手拡大」の「拡大」を削除し、「担い手不足の解消」と修正した。
　さらに下の「（３）地域づくり」で、「大学」のあとに「大学等教育機関」を追加した。
　次に、１３ページ、施策の体系図の施策の方向性も追記している。体系図については今後の検討となっていますので、とりあえず元の体系図に追記していますが、それぞれの方向性を１つずつ追記した。
　まず、「人づくり」には「学びや活動に向かう主体性の涵養」と涵養の説明文として、「涵養（かんよう）：無理なく、ゆっくりと時間をかけて　物事を良い状態に育てる（養う）こと。」を追記した。
　次に「つながりづくり」には「多様な人が関わり合い、つながりあえる場や機会の創出」を追記し、「地域づくり」には「自律的・継続的な活動の仕組み化に向けた伴走支援」をそれぞれ追記した。
　続いて１４ページ、下部の「主な取組」で「学び直し」は最近ではリカレントという

表現をよく使うようになったので「リカレント教育」に修正した。少しニュアンスの違いなどもあるかと思うので、こちらは検討をお願いしたい。
　次に１５ページ、「（２）すべての市民が学べる多様な学習形態や情報提供の充実」では、まず、「情報通信技術を活用して」を削除し、それに伴い「主な取組」の「情報通信技術」を「オンライン」に修正し、「オンラインを活用した学習の推進」とした。
　前後するが、その前の「オンラインを活用した事業」のあとに「の展開」を追記した。
　次の「（３）学習した成果を活かす仕組みづくり」では、「その成果を地域に還元する」と「還元」が出てくるので、「その成果を地域活性化や課題解決に向けた主体的な活動に発展させていくことが重要です。」と修正した。
　そのあとの文章で「「人づくり」が重要であり、」とあるが、これまでの会議や打ち合わせでは、人づくりのみに重きを置いている訳ではないこと、また、そのあとに「還元」も出てくるので、その辺りを含めて文言修正の検討が必要かと思う。
　主な取組で、「ボランティアの養成と活動の活性化」で活性化が抽象的な表現なため、具体的な表現に変えるか、削除などの検討が必要という意見が出た。
　次に１６ページ、「（５）地域の連携や課題解決力の強化」の「子供」の「供」を、平仮名表記の「ども」に統一している。
　また、「ＰＴＡ」がない学校も増えてきているため、「学校とＰＴＡ」を「コミュニティスクール」に修正した。市内全校がコミュニティスクールとなっているため、「主な取組」の「コミュニティスクールの設置」も削除している。
　最後の１８ページ、「芸術・文化」は「文化・芸術」の並び順の方がしっくりくるので、並び位置を修正した。
　また、「子供」と「大学」の後の表現も、これまでの修正にならい、統一した表現に修正している。
　以上が、前回会議以降に修正した生涯学習基本方針の内容の説明となる。

（倉持議長）
　それでは、今説明していただいた、黄色のマーカーが引かれてあるところを中心にご意見をいただければと思う。レベル感が色々とあるが、１３ページのこの施策の体系図に関しては、かなり全体に関わるところで、それぞれ案として一つずつ加えていただいているので、この辺りを加えた方が良いのか、加えない方が良いのか、それ自体でも良いし、このような中身で良いのか、このような文言で良いのかということも含めて、ご意見をいただければと思う。
　打ち合わせでも、１３ページの「学びや活動に向かう主体性の涵養」が気になっていた。主体性そのものを涵養するとなると、少し話が大きいと思う。良いかどうかは別だが、「主体的な学びや活動を引き出す環境づくり」とかであれば、まだ少し分かると思う。主体性そのものより、主体的な学びとか。何が違うのかと思うかも知れないが。

（松山委員）
　他の２つが機会の提供や情報提供など、周辺的な環境整備のイメージの言葉に対して、これは直接、主体性の涵養に関与していきます、という距離感が少し違うなという気がする。施策であればもう少し、環境に対するアプローチというニュアンスはあった方がいいと思う。

（倉持議長）
　私も気になっていた。このように、少し気になるところなどがあれば、ご意見いただければと思う。

（松山委員）
　全体的には非常に充実してきている。まずはご検討いただき、ありがとうございます。
　少し細かいのだが、１４ページに「リカレント教育」とあるが、最近よく使われる言葉ではあるが、私がイメージするリカレント教育は、何かの教育機関、公的な教育機関に公的、私的、機会に戻っていくというのも学んで、またそれを活用していくという循環のイメージがある。これはそのようなニュアンスで使われているか。
　例えば、中学校に入り直すとか、夜間中学をイメージしているのであれば、まだ分からないでもない。どのようなニュアンスなのか。

（倉持議長）
　そのあたりも、事前打ち合わせの際に少し話が出た。今のリカレント教育はもう少し広い意味で使われることが多い。リカレント教育は、今と昔で政策上の違いのようなものもある。昔言われたリカレントは、大学や大学院にビジネスマンが入り直すという意味が強かった。今のリカレントは、例えば女性の再雇用のようなことも含めている。
　ただ、どちらかと言えばキャリアの色は強いと思っている。

（松山委員）
　本来のリカレントはもう少し教養的な意味合いだったと思うが、どのように受け取るか。日本の文脈で少しキャリアのニュアンスが前面に出てもよいのであればいいのかとも思う。やはり、学び直しや大学に戻るという感覚が広く、再入学みたいなイメージが強い。

（倉持議長）
　例えば、夜間中学などで学ぶということもリカレントに入るか。概念的なリカレントと日本で政策的に使われているリカレントで、従属的だと入らない。経済力を高めるための感じやイメージがある

（松山委員）
　社会人のキャリアアップのようなイメージが非常に強い。だが元々は、確かフィンランドだったか、あの辺から最初に出てきたときは、市民の方が大学に入り直して、教養的な学びを見つけて、それを自分の人生を豊かにしていくというニュアンスのものとして想定されていたのが、日本では、社会人がゆくゆくは経済の発展に結びつくような政策的な使われ方をしていて、そこのずれを非常に感じる。本来であれば夜間中学みたいなものもおそらく入るのだろうと思う。

（倉持議長）
　しかし、一般的に日本リカレント教育と聞いても、あまり夜間中学は思い浮かばない。

（松山委員）
　思い浮かばないし、清瀬でそこを推しているのか。本当に大事なテーマだが、社会人の学び直しの方が意味が広いかと思う。あえて変えることにどのぐらいの意味を持たせるか。

（倉持議長）
　ただ、やはりリカレントと入れることによって、学びと食のつながり、キャリアのつながりのようなことは少しクローズアップができるような気がする。
　女性たちが１回子育てや介護などで退職して、学びを通して力をつけ直し、また社会に出て行くときに使われるようなカラーが出てきているので、学びというのは食とも関係ない話ではないのだというメッセージ性が出てくるが、またそちらに少し寄ってしまうというのはある。
　今、私の大学で行っているリカレント教育事業は、教員の職に結びつけるところがゴールである。教職を目指す学校なので、リカレント教育事業で社会人に、私の大学で学び直していただいて、何人がきちんと先生になれたかというところで成果を出さなくてはならない。制度上の色々な縛りがある中で行うというのはあるが、リカレントという学びそのものではなく、その出口のところに結構評価がされるのだと最近思ったことがあった。余談だったが、リカレントはそのような感じでご検討ください。それ以外のところも含めて何かご意見いかがでしょうか。

（西田副議長）
　１６ページの上の文章は、子どもの「ども」を全部ひらがなに変えているが、「主な取組」の方は変わっていないので、ここも統一した方が良い。

（倉持議長）
　これは最後に一斉点検をしていただいて、子どもの「ども」は全部ひらがなにしていただく。その他いかがですか。

（西田副議長）
　１５ページの（３）の「主な取組」の「ボランティアの養成と活動の活性化」。主な取組に上げるには、少し抽象的だという話をさせていただいた。

（倉持議長）
　他が具体的だが、何をすることが活動の活性化なのか、事業としてはどのようなことなのかということが確認しづらい。

（西田副議長）
　上の文章は「指導者やコーディネーターの養成」とあるが、それとは別に「ボランティアの養成」と括る必要があるのかどうか。

（倉持議長）
　いや、やはりボランティアの養成は大事なのではないか。

（西田副議長）
　これは横並びにしないで、別枠でボランティアと分類して言い切ってしまえばよいか。

（倉持議長）
　読み聞かせボランティアとか、まずは第一歩のボランティアとして、そのような経験をしていきながら、リーダーシップを発揮していく方の養成など両面が必要だ。

（松山委員）
　私のイメージだが、活動の活性化に当たる「何か」という具体的なイメージとして、入口支援だけではなく、実際に学んだ後に、やはり継続が大変だったりする。ある程度、何かそこに伴奏支援があるイメージを想像した。逆に考えるとどうなのかと。

（倉持議長）
　具体がもう少しイメージできれば整理しやすいけれど、先程の読み聞かせボランティアのようなところが、例えば、図書館などでそのような養成講座があったとしたら、ボランティアを養成した後に、その活動の場や機会、登録をして、今度このような会があるので来てくださいと案内して、最初の活動を少しサポートする。もし、そのようなプロセスが図書館の方であるとしたら、活動の活性化や活動支援などにつながっていくと思う。

（西田副議長）
　それはこの上の「各種展示会、発表会の開催」にも含まれるか。それであれば、「ボランティアグループの伴走支援」とした方が分かりやすいかと思うが、いかがでしょうか。本当にそれを仕組みとしてやるのか。

（倉持議長）
　先ほどの「学びと活動の循環」で言うと、養成という学びをしても、その後の具体の活動になかなか結びつかない。特に初めての人たちにとっては、最初の活動をプッシュしてあげるとか、橋渡ししてあげることも大事だということが言われている。
　生涯学習系の人材バンクは、大体どの地域も上手くいかないところが多く、生涯学習リーダーや指導者、養成講座までは行うが、その後人材バンクを作って登録しても、上手く回していけない。やりたい人たちはやりたいし、やりたいという人とマッチングをするまでを行政で行うと、それはそれで、ものすごく大変である。
　また、ミスマッチが起こった際に誰がどのように責任を取るかも大変である。ボランティアのやりたい構想や、活動の中での学びや関係性を作っていくことが大事だというところをコーディネートしてくれるところが無いと、なかなか運用しきれなかったという反省が、生涯学習協会であると思う。その他、気になるところはあるか。
　１３ページに戻るが、私はやはり「涵養」と２つ目の「つながりづくり」なども本当に好みだが、「仲間づくり」「仕組みづくり」と来ているので、３つ目も「何とかづくり」という語尾にしたい。

（西田副議長）
　つながりの中での仲間、仕組み。

（倉持議長）
　学習した成果を生かす仕組みづくり。仲間づくりはもう言っている。場や機会の創出だから、多様な人がつながり合える場づくりとか。
　最近かなり言われることだが、今まで生涯学習は、割と前の図がそうだったと思うが、同じ関心集団だけではなく、年代やライフステージに合わせて、色々と学習課題や発達課題が生まれる。そのような学習場面を作ることが大事だと言われてきたが、反対に、同年齢集団と同課題集団ではなく、縦のミックスで、異年齢や違う人たち同士が出会う場こそ、社会教育ができることなのではないかということが言われている。外国人との相互理解や、障害を持つ、持たないなど、多様な人がという、とても大事なところを入れていただいたと思うけれど、表現はもう少し練ることができるかと思う。
　また、この地域づくり「自立的継続的な活動の仕組み化に向けた伴走支援」が少し難しい。この意味とか意図というか、どのような感じのことをイメージしているのか。

（事務局）
　具体的なイメージとしては、これが中央審議会の中で使われていた言葉であり、地域づくりにつながりそうなところを引用できないかということで、案として入れた。逆に具体的にこのようなイメージというのがあれば是非、ご意見をいただきたい。

（倉持議長）
　中教審のこの難しい文章をまとめるということは、非常に難しいことだ。

（事務局）
　どのような表現を使えばよいか。

（倉持議長）
　この「地域の連携や課題解決力の強化」、「清瀬らしさを活かした学びの活用と振興」をどうするか。

（松山委員）
　ちなみに伴走支援だが、先ほど話題になっていた１５ページの「活動の活性化」について、伴奏支援でもおかしくないが、確かに少し難しい。

（倉持議長）
　どういうことをここで現わそうとしているのか。仕組みを作るということと、伴走支援をするということの両方が大事。

（松山委員）
　自律的継続的な活動の仕組みの中に、伴走支援が入るということではない。仕組化とはどのようなことか。

（事務局）
　仕組みができるように伴走支援をするという流れ。

（松山委員）
　その仕組みを作る人は、信念があるということになっていく。抽象的なイメージだと分かりづらいので、何か具体的な例はあるのか。

（倉持議長）
　何となくイメージするのは、例えば、「清瀬の自然を考える」というような講座があったとして、その講座を受講した人たちが、自分たちが清瀬の自然を守る担い手になろうとした時に、自主グループや自主サークルなどを立ち上げようとか、立ち上げた後に何か活動をしていこうという時に、このようなことをしないと執行できないというような相談に一緒に乗ったり、講座の提供だけではなく、活動場所を考える時には、市内でこのような場所があるとか情報提供をしたり、活動を始めた時には、「今度文化祭で発表してみませんか」など、そのようなのが伴走支援。相談者が育っていき、最終的にＮＰＯ団体などになっていけば、自立して継続する活動になったということ。
　例えばＮＰＯだったら、今度は協働して一緒に次の担い手養成講座などを立てようとなる、など。

（西田委員）
　仕組化を抜いたら分かりにくいか。「自律的・継続的な活動の創出」にするか、「活動に向けた」でもいいかも知れない。補足させている気がする。

（倉持議長）
　立ち上げて、行政が介入するとなると、あまり後が上手くいかなくなることもある。そうかといって、ずっとお世話をし過ぎると、自立的な活動を阻害している気もする。その辺のバランス感というのはすごく専門的でもあるから、この伴走支援というところに、そのエッセンスが含まれている。
　職員の専門性というか、そのような部分が組織としてのサポートやバリエーションとしてそこに含まれている。そのような意味でも大事なところだが、それが表現できるか。

（松山委員）
　例えば、「市民の」のように、何か主語を入れるのはどうか。

（事務局）
　その方が分かりやすい。誰目線というのが無いとおそらく分かりにくいと思う。

（倉持議長）
　前提になっているから、入れるとしたら全部「市民の」となるのだが、「人づくり」のところだけは「市民の」と主語が入っている。
　ただ、入れた方が、よりここの部分が分かりやすい。活動するのは「市民」で、伴走

支援をするのは「行政」と、中身のイメージがしやすい。
　最初に学びを作って、つながって、そのつながりをもとに何か活動をしようと思い、そのときの活動のプロセスを支援していくのも生涯学習の行政の仕事だ、というのを入れた。他に何か気になるところはあるか。

（玉置委員）
「人づくり」の「施策の方向性」のところで、「市民が」と、次の「全ての市民が」とあるが、全部「全ての市民」ということか。

（倉持議長）
　おそらく２番目は、「全ての」と入れることにより、年齢や障害の有無など、その多様性を表したいのだと思う。けれども、言葉だけ読むと、ここだけ「全て」の市民で、他は「全て」ではないのかという印象がある。この「全ての」という言い方はよく使うが、体系図であるから、この中での整合性は取れた方が良い。
　トーンが少し違うとか、表現が違う。これはなかなか解決が難しい。全て取ってしまうと意味が変わってしまう。誰１人残さないというような言い方をよくするが、それをここに入れるとまた長くなってしまう。
　だが、一番上の「市民が」を取るということもあるのではないか。そのようにすれば、２番目の「全ての市民」がそのままの意味で残る。１個目と２個目が並んでいるので、余計にこちらは全てではないのかという印象を受ける。
　その他いかがか。

（西田副議長）
　１２ページの、①の基本目標の２行目、「学びと育ちの循環型社会の実現を目指すこと」とあるが、その下の、図の隣にある四角で囲まれた文言は、そのまま「実現」で良かったか。

（事務局）
　文章中の「実現」は削除だが、こちらはそのままという話かと思う。変えることはもちろん可能であるため、良いものがあればご提案いただきたい。

（倉持議長）
　教育振興基本計画の基本理念は、この「子供が育つ　市民が育つ　まちも育つ　清瀬の教育」、その次の「学びと育ちの循環型社会を目指すこと」という言葉も入っていたか。これもそのまま清瀬市教育振興基本計画のフレーズだったか。

（事務局）
　清瀬市教育振興基本計画で使用されていて、そのまま引用している。

（倉持議長）
「という思い」と書いてあるが、「学びと育ちの循環型社会を目指すこと」は、何と位置づけられているのか。

（事務局）
　施策の方向性「子供が育つ　市民が育つ」の後に、「基本理念には次のような思いが込められています」ということで、４つの項目を挙げている。その中の１つで、「市民が相互に教え合う伝え合うことによって深まる学びと育ちの循環型社会を目指すこと」というところで、１つの理念の中に入っている。

（倉持議長）
　では、「思い」という言葉も教育振興基本計画の表現ということか。それであれば、このまま「思い」を踏まえて良い。「学びと育ちを生かす循環型社会を目指すこと」を「目指すことの実現」と言い直しているということか。この１８ページの社会教育主事や社会教育士の配置は前の計画にも入っていたのか。社会教育士の配置は、制度上はまだ難しい話であり、「社会教育主事の配置と社会教育士の活用」という方が、今の文脈ではより正確か。社会教育士の称号を持つ人を、ここに書いてある子どもや市民生活、福祉や環境の様々な生涯学習関連事業部に配置し、居てもらうことでより連携して、生涯学習の施策が全庁的に進行できる。一方で、教育委員会としては、専門職員である社会教育主事をコーディネートする形が望ましい。また、社会教育士を民間にも配置・活用することで、ＮＰＯやその他連携先にも社会教育士がいると、結果として、ネットワークがより豊かに広がる可能性がある。そのため、社会教育主事の配置をまず優先し、その後に社会教育士を活用する形が良いのではないかと考えている。
　改めて内容を確認すると、良いことが書かれていると感じた。より目を引く形で強調するために、少し補足を加えておくと良いと思う。清瀬市は、社会教育主事が居たことはあるか。

（事務局）
　資格を持っている人はいるが、任命したことはない。

（倉持議長）
　福生市の教育長が今年の４月に、主事や学芸員などを多く発令したという話を聞いた。専門職ではなくても、元々称号を持っていた方を発令することにより、専門性をきちんと見える化したという話を伺い、専門職配置や主事講習を研修に送ると色々と経費がかかったり、人を回すのは大変だったりするが、そのようにしなくとも、元々資格を持っている方を発掘して配置することを最初の１歩にできるという話を聞き、他の市でもできたらいいと思った。ここに書いてあることは大事だと思う。
　１１月の会議の時に、このようにしたいとか、このようなのが良いなど、意見交換ができるが、１２月の教育委員との懇談会の前に、大方の最後の調整と確認を行い、その次の２月の会議の時には、完成版を教育長に提言するというスケジュール感のため、本格的に検討できるのは次の会議までということになる。そのため、もし気になるところや、このようなことを足したり引いたりした方が良いということがあれば、ぜひ次回までにご意見をいただきたい。
　だいぶ更新されてきて、新しいバージョンになりつつあるので、その辺も進めていきたいと思う。

それでは、議題の２は以上とする。３番の報告等をお願いする。

（事務局）
まず１点目として、１０月３日の東村山市で開催予定の第４ブロック研修会について、西田副議長と事務局が出席予定だが、他に参加希望者はいるか。

（倉持議長）
参加で回答をお願いしたい。

（事務局）
承知した。
２点目として、各委員にメールで案内した「不登校の子供を支える保護者のひろば」について東京都から案内があったので情報共有する。
内容については、今回の不登校支援ネットワーク・フォーラムに似た形式ではあるが、ご確認いただきたい。事務局からは以上である。

（倉持議長）
その他、何か報告や連絡はあるか。
それでは、次回１１月２０日は、引き続き、今日の議題を検討できたらと思う。今日は欠席の委員が多かったので、今日の議事録を見ていただきたい。連絡する際に、不登校支援ネットワーク・フォーラムの振り返りと、来年度へのアイディア、生涯学習基本方針の修正案などあれば、検討してもらうように伝えていただきたい。
それでは、本日の会議は以上とする。